

魂の錬金術師 ウィリアム・ブレイクの人と思想
William Blake, a Spiritual Alchemist: His Life and Mind

泊 敦子
TOMARI Atsuko

William Blake (1757-1827) was a painter, a craftsman, and a poet. He produced variant pieces throughout his life. Blake's manifold art works were closely connected with his spiritual life. I am impressed with Blake's life and works because he was given the gift of something important from an invisible phenomena. In this essay, I define that Blake's life had a close relationship with God, the cosmos, heaven, earth and nature. I introduce an outline of Blake's life, too. I tried to research the mainspring of his activity.

私をはじめブレイク作品と接したのは、中学一年の時であった。彼の作品 *Milton* の序 (*Preface*) に Charles Hubert Parry (1848 ~ 1918) が作曲した *Jerusalem* を聴いたのである。それは聖歌隊とオルガンによる演奏であった。当時12歳だった私は、曲自体の素晴らしさとともに、その詩の力強い言葉の響きと、求心力のようなものに強烈に惹かれた。以来私は、ブレイク作品が持つ一種独特の、神秘的かつ魂に直接訴えかけてくる「引力」に魅力を感じ続けてきたのである。ここでは、そうしたブレイクの魅力の源泉を探りたい。

ブレイクは、実にさまざまな形の芸術を生み出した。詩、版画、水彩画からその思想に至るまで、生涯を熱い魂の発露で埋め尽くした人、という印象を私は受ける。

ウィリアム・ブレイク(William Blake)、1757 ~ 1827。生涯の殆どを生地ロンドンで過ごした彼は、画の好きなことを見抜いた父親の計らいで幼い時から画学校へ通い、その才能を育て始めた。家庭は、職人の父を家長とした中流下層階級に属するものであった。長じて14歳ごろから徒弟として彫版術見習いの修行などを始め、23歳ごろには銅版画家として

Royal Academyの展覧会に出品を始めた。しかし、当時のRoyal Academyの気風は「銅版画師」を一段低いものと見なしており、ブレイクは評価されなかった。彼はまた、詩も早くから書き始め、1783年には最初の詩集を出版している。

ブレイクは、かなり幼いころから、発作や昏睡に陥って幻覚、靈感を得るといったことがあったようで、この点を新井明氏は「芸術家としての感性にめぐまれていたということだ」としている(1)。彼の殆ど全ての詩作品に用いられた「彩飾印刷法」(2)も、彼と同じく芸術的才能に恵まれながら25歳で夭折した弟ロバートが、ブレイクの夢に現れて告げた方法、との説がある。しかし彼は、その生存当時しばしば言われたような「狂人」ではなかったであろう。トマス・インモースは言う、「ブレイクは、ブレイク本人のいうところでは、幻想が日常の体験だったという。ブレイクは、その人となりと作品にいろいろ問題があるにしても、信念のある人間であった。たしかにいっぶう変わっているが、おそらく本ものの神秘的な神体験をした人であろう。彼の中では、一生涯精神と肉体がせめぎあったが、それでも超自然への目はそなわっていた。すなわち救いや靈感、光明、叡智がどこから来るかということは、彼にははっきりしていたのである」(3)。詩、画、知人に当てた手紙の内容などを通して垣間見る彼の思考は、常識や通例を超越した、一種錯乱とも取られかねない性質を含んでいることは確かである。自らの思考と肉体からあふれ出るさまざまな種類のインスピレーションを、万人受けすべく工作する、といったことのできない性質の人だったのである。職人氣質で「一本気すぎる」(4)性格だったせいもあるだろうが、全てを一人で見通し、また全てを自らの手で芸術に結実させる術を、彼は持っていたのである。そうした意味で、彼は紛れもない天才であった。人間の持つ業や、降りかかる災難、あるいは神から受ける祝福といった、普通は予知不能とされるものを感知し形にしていったブレイクは、魂の錬金術師である。

ブレイクはまた、後に続く芸術家にも大きな影響を与えた。ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti) は1847年、18歳の時に大英博物館の館員からブレイクのオリジナル草稿を買い取っている(5)。ロセッティはのちに、ブレイクの伝記に寄せた解説で、ブレイクの「きわめて独創的な色彩のプリズム」を讃え、「それぞれに極限の力を発揮する色彩が並べて使われ、鮮やかな手腕によって真実を伝え、その効果は驚嘆すべき新しいものだ」と述べた(6)。

さて、ここにひとつ、ブレイクの特質を伝えるエピソードを記したい。ある時ブレイクは「先日ミルトン(7)がやってきた」と述べた。具体的には、作品『ミルトン』『エ

『ルサレム』について『ミルトンが間違いを訂正するために天国からもどってきてブレイクの中に入り、ブレイクはイエス・キリストの教理を肯定して自己犠牲と赦しとを教え、「イマジネーションの世界こそ死後の永遠の世界だ」と主張』(8)したのだそうである。こうしたブレイクを、岡本謙二郎氏は次のように指摘している。「かつてミルトンという大作家、大詩人がいて、無意識のうちに、ミルトンはその作品を創造するという行為によって、その作品の中に変様して生きつづける可能性を樹立した。現在、ミルトンという生身の人間はもう存在していない。が、かつてミルトンが存在したという事実、ミルトンの創造した作品は現在でも存在している。というより、そう観じるブレイクがいて、ミルトンというかつて存在した詩人、いまはもう死んで肉体のない詩人が、むかし活躍したという事実は現在でも存在していることを実証することによって、ブレイク自身が存在する可能性をもつ。」(9)つまり、生死とは単に肉体の次元だけでのことであって、芸術家の生命は作品の息づきと連動しているものなのだ、ということであろう。

再びブレイクの作品に立ち戻る。彼の詩の言葉は、強い求心力を持って私に語りかけてくる。まるで無心な天才児が、周囲の理解を得られぬ中でも、その溢れる才能を言葉にして話し続けるように。そして彼の画は、神と人との境を越え、生死の境界線をも越えた、力強さといのちへの賛美、また、人の業への憐憫に溢れていると感じる。私は彼の作品に相対するとき、自分も作品と共に次元を超えてゆくような、不思議な感覚に誘われる。彼には「生死と天地」「人智と神業」といった複数の次元が見えていたのであろう。

こうしたブレイクも、実人生では苦しいことが多かった。神に祝福され、しかしそれゆえに苦しむ無心な一人の天才ブレイクと、世故に長けた厚顔で狡猾な人々との戦いの生涯であったようにも受け取れる。しかし、実人生とは何であろう。今一度、ブレイク自身の言葉を引いて考えたい。1827年、死の年に旧友にあてて彫ったグリーティング・カードに、彼はこう記している。(旧友である)「フラックスマンは逝きましたし私たちも皆まもなくその後を追わねばなりません。一人残らずその人自身の永遠の家へ、迷妄の女神自然と彼女の諸法則を後に五体の全法則から離れた自由の中へ、心の中へはいるのです。そしてそこでは一人残らずその人自身の家の中で王であり司祭であるのです。」(10)つまり、今われわれが目にし、耳にしている彼の作品もまた、紛れもなく彼の実人生だということではあるまいか。

元テイト・ギャラリー英国美術部長のマーティン・バトリンは、1990年に東京の国立西洋美術館で開催された「ウィリアム・ブレイク展」に興味深い文章を寄せている。その一部

をここに紹介したい。「〔……〕晩年のブレイクは新たな楽天主義を示している。彼の晩年の状況と芸術とが反映するのは、和解の感覚であり、それは人生との和解、運命との和解、そして彼が1790年代の急進的な希望を失って後、長年暗闇の中で反発してきたキリスト教精神との和解だった。」(11)

天才で、突飛で、気難しかった彼が、妻とは終生仲睦まじかったということと、その死が、天使のように安らかだったということに、私はほっとしている。

ブレイクの生涯はまさに、「神・宇宙・自然との和解」であった。

[注]

- (1) 新井明『英詩鑑賞入門』(研究社、1986年) p.40
- (2) 「一種の不浸透性薬液で銅板の上に自作の詩句をしるし、また周囲の装飾図様の輪廓をえがき、白地の部分に硝酸をかけてかなり深く腐食させ、描かれた輪廓を一種のステロとして残し、それを好みの色で印刷し、図様に手彩色を施す方法」(寿岳文章訳『ブレイク詩集』彌生書房、1968年、p.146) 銅腐蝕彫版法とも言う。
- (3) トマス・インモース、尾崎賢治訳『変わらざる民族 演劇・東と西』(南窓社、1972年) p.122
- (4) 潮江宏三『銅版画師ウィリアム・ブレイク』(京都書院、1989年) p.70
- (5) アリシア・クレイグ・ファクソン、河村錠一郎・占部敏子訳『ロセッティ画集』(リプロポート、1993年) pp.33~34、p.239
- (6) 同p.34
- (7) John Milton、イギリス、1608~74。ケンブリッジ大学卒。*Paradise Lost* (1667), *Paradise Regained* (1671), *Samson Agonistes* (1671)の著者。
- (8) 鈴木幸夫編『英米文学辞典』(東京堂出版、1978年) p.332
- (9) 岡本謙二郎編集・解説『ブレイク 版画と水彩』(岩崎美術社、1972年) 解説p.18
- (10) 潮江宏三、p.283
- (11) 国立西洋美術館、雪山行二ほか編『ウィリアム・ブレイク展』(日本経済新聞社、1990年) p.39、喜多崎親訳